

## 平成新山フィールドミュージアム構想の推進に関する観光客アンケート調査

長崎大学工学部 学生会員○末吉龍也  
 長崎大学工学部 フェロー 高橋和雄  
 長崎大学工学部 正会員 中村聖三  
 長崎県 正会員 其田智洋

## 1. まえがき

雲仙普賢岳の火山災害を受けた島原市と深江町では、復興事業が順調に進み、火山観光・火山学習体験の場となる雲仙岳災害記念館、道の駅「みずなし本陣ふかえ(土石流被災家屋保存公園)」、大野木場砂防みらい館および平成新山ネイチャーセンターなどの拠点が整備されている。これらの拠点と従来の観光施設である島原城、武家屋敷などとの連携を図り、順調な入込み客を宿泊に結びつけることが、地域の活性化に不可欠である。そこで、島原地域において、地域の行政、住民一体となって、平成新山の景色や災害遺構、火山関係の施設などをまるごと一つのフィールドミュージアムとして構想し、施設間のネットワーク化を図っている。本研究では、この構想の中核となる各施設および旧来型の観光施設の代表である島原城において観光客アンケートを実施し、観光動態、交通アクセス、構想の周知状況・観光資源としての評価などを分析する。

## 2. アンケート調査の概要

アンケート調査は、平成15年11月1、2日、島原市と深江町に位置する雲仙岳災害記念館、道の駅、大野木場砂防みらい館、平成新山ネイチャーセンターおよび島原城の5施設で実施された。施設の見学を終えた観光客を対象に、調査員2人一組となって平成新山フィールドミュージアムマップを提示しながらアンケートの回答を得た。5施設の回答者数は、それぞれ100人、68人、53人、53人および73人である。

## 3. 観光動態

(1) 観光客の特性 観光客のグループ特性を見ると、「個人旅行」63%、「グループ」20%、「団体」16%で、施設別に見ると大野木場砂防みらい館には「団体」客がやや多く、平成新山ネイチャーセンターには、「個人旅行」客が多い。

どこから来たかを聞いたところ、「長崎県」、「福岡県」および「熊本県」が多く、全体の68%を占める。施設別に見ると、平成新山ネイチャーセンターと大野木場砂防みらい館には「長崎県」内からの観光客が多く、島原城には「福岡県」方面からの観光客が多い。

宿泊日数については、「1泊」50%、「日帰り」35%、「2泊」10%の順となる。道の駅および平成新山ネイチャーセンターには「日帰り」客が多く、大野木場砂防みらい館には「1泊」客が多い。

(2) 観光客の行動 島原市内での滞在時間は「半日程度」44%、「2時間程度」24%で半日以内が68%を占める。このように、通過型の観光行動が目立つ。「終日宿泊有」は19%である。

島原市内の観光地の他に今回の旅行のコースを聞いたところ、「雲仙温泉街」が44%、次いで「仁田峠」が31%となっており、島原の観光客は「雲仙温泉街」とセットになっていることが分かる。つまり、宿泊地が「雲仙温泉街」で、行きや帰りに島原に立ち寄っていることがわかる。「グラバー園」、「平和公園」などの長崎市内とのセットは6~7%、「ハウステンボス」とは2%である。長崎県内の大型観光施設と島原市内の施設との連携は強くない。一方、「熊本城」および「阿蘇」などの熊本方面とのセットは3~4%である。

今回の観光の主な目的を聞いたところ、雲仙岳災害記念館、道の駅、大野木場砂防みらい館、島原城は観光の主目的になっているが、平成新山ネイチャーセンターについては「いくつかの一つ」および「通過点とする」とする回答が目立つ。移動手段を見ると、各施設とも自家用車が多く、71%を占める。特に平成新山ネイチャーセンターでは自家用車が91%となっている。次いで、観光バスが全体の18%を占め、大野木場砂防みらい館と島原城ではその割合が他の施設より少し高い。

(3) 島原観光で必要なことから 島原観光をするために今後望むことを聞いたところ、「観光案内標識の整

備」、「諫早方面からの高速道路の整備」が上位2位を占める。「観光案内標識の整備」については、大野木場砂防みらい館の観光客の割合が高く、「諫早方面からの高速道路の整備」については道の駅の観光客の割合が高い。雲仙岳災害記念館については「特になし」とする回答が半数を超えている。平成新山フィールドミュージアム構想推進会議の検討事項として挙げられている「市内観光循環バスの整備」は要望が少ない。

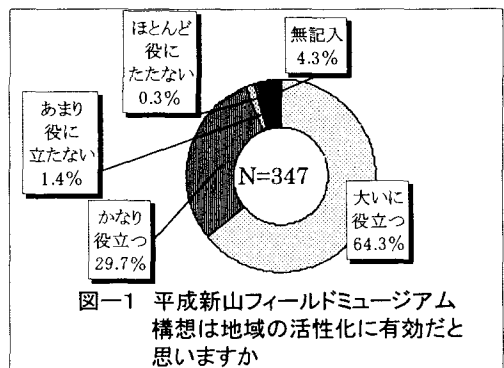
#### 4. フィールドミュージアム構想に対する反応

(1) フィールドミュージアム拠点施設における観光行動 フィールドミュージアムの拠点である各施設において島原市内で立ち寄る施設を聞いたところ、雲仙岳災害記念館および道の駅の観光客の約半分は、これらの両方の施設に立ち寄っている。また、大野木場砂防みらい館と平成新山ネイチャーセンターの観光客の半分強は雲仙岳災害記念館および道の駅に立ち寄っている。大野木場砂防みらい館と平成新山ネイチャーセンターの観光客の30%はこれら2つの施設に立ち寄っている。しかし、雲仙岳災害記念館と大野木場砂防みらい館および平成新山ネイチャーセンターとの繋がりはいきわめて小さい。島原城の観光は雲仙岳災害記念館および道の駅にも40%程度立ち寄っている。このように雲仙岳災害記念館、道の駅、島原城を結ぶコースは定着してきているようである。一方では、島原城の観光客は島原城以外の「どこにも寄らない」が30%を占めており、火山観光に全く無関係な層も見受けられる。

(2) 拠点施設の周知状況 火山観光の拠点である4つの施設の内容や特色を知っているかに対しては「だいたい知っている」、「あまり知らない」、「ほとんど知らない」が同程度である。雲仙岳災害記念館の観光客では知っている割合がやや高いが、他の施設では「知らない」とする割合が高く、特に島原城の観光客は60%強が「ほとんど知らない」と回答している。

(3) 災害復興と火山観光化への評価 島原の噴火災害や災害復興については「良く知っている」および「だいたい知っている」を合わせると84%を占める。島原の噴火災害および災害復興については良く知られている。また、観光客によって平成新山フィールドミュージアム構想は「地域の活性化に役立つ」と評価されている(図-1)。

フィールドミュージアムを知ってもらうために必要なことは「テレビ・ラジオによるコマーシャル」、「新聞・雑誌による周知」に加えて、「施設毎のパンフレットに施設の位置図の相互掲載」、「全体の案内板の設置」および



「道路案内板の増設」など島原に来てからの情報の提供も必要とされている。雲仙岳災害記念館の観光客は宣伝を重要視している。

(4) マップの評価 平成新山フィールドミュージアム構想推進会議がまとめた平成新山フィールドミュージアムマップ「雲仙火山地球探検」(折りたたみ式)については「分かりやすい」、「持ち運びしやすい」および「大きさが適当」と評価されている。マップ作成の目的が果されている。

(5) 植樹の管理方策 普賢岳の噴火災害で流焼失した森林を回復するために、観光客に植樹をしてもらうことは、学習・体験、参加型の観光資源開発のために考えられる有効な方法である。しかし、苗木を植えても草刈りや肥料などの手入れが少なくとも5~10年の間必要である。植樹を観光客にしてもらった場合には、手入れを誰がするかが問題となる。そこで、「植栽の管理を地元の人にお願いとすれば、苗1本いくらで買いますか」と聞いたところ、「500円」46%、「1,000円」38%と1,000円以下が84%を占めている。

#### 5. まとめ

大野木場砂防みらい館で行った施設を知った理由・これからの整備計画・周辺整備のニーズおよび施設の管理費の考え方および提言については講演時に発表する。